

友人たちが噂する（天の夕顔、中河与一）に、私はそれほど魅せられなかった。図書館から借り出したこの本を、外国でも評判な作品と級友の一人は盛んに吹聴しまくっていた。たらい回しにして読み耽り、道ならぬ恋のときめきの展開に、うっとりしたりニヤニヤと相槌を打ったり、戦時下とは言うものの私の女学校では密かに囁かれた文学作品であった。彼女たちの異性への関心は、戦線勝利のニュースよりも遙かに頻度が強い。尤も、私も領いたり、さも同調した表情を作ったがそれはあくまで一時の方便に過ぎなかった。本好きが高じて図書館で濫読していた私の目的は、すでに（芥川龍之介）に絞られていた。中でも（羅生門）の短編は、私を強く捉えて離さなかった。というのは、作品の舞台のモデルになる平安京の羅城門（今昔物語）が、私の住んでいる目と鼻の先にある善光寺さんの山門を彷彿とさせたからである。極端に言えば私は朝夕、善光寺さんの膝下で育ったような感じであった。ただ、作品の内容そのものが、悪を描き、許容するようなテーマだけに、十七才の女学生に受けるものではないと察していたから、私は一人その事を封印し続けた。あくまで胸の内にしまっておこう、と思ったのだ。・カラスが夕暮れ、罅すきに帰るころ、芥川が描写した、（夕焼け空の中の胡麻のよう）という一行一行を指で追うようにしてなぞった。自分の頭の中に想像を膨らませて、多分、彼もこのような状況を描きながら筆を執ったであろう、と考えたものだ。しかし、山門の屋根の天辺には鴟尾しびが無いことや門の両脇に阿吽あうんの金剛力士の仁王像が屹立する善光寺さんは、原作とはいささか違って私の感興を削ぐことも無いことはなかった。が、まあ、それは大した欠点にはならなかった。それ以上に、柱を覆う丹塗りの剥げ具合などが、数々の火事、飢饉で襲われた洛中の荒廃したイメージと同一風景に重なり、多感な私を掻き立てた。そうして何時かは再び、山門の中二階の回廊へ登ってみたいという小さな願い事が頭の中に徐々に形成されていた。幼い頃、兄たちと階段を登って遊んだ山門の二階への階段は、何時頃からか、戸が閉じられ鍵が掛かっている。大人の目を盗むようにした幼い時代の禁じられた遊びが私に蘇って来たのである。・（じゃあ、梯子を使えばいい！）小作人を使って農業を手広く営んでいる私の家には、母屋にも納屋小屋にも簡便な梯子が置いてあった。あれを使えば女の私にだって容易く中二階へ登ることが出来る、そう考えていた。――

昭和二十年七月六日、明日は七夕を迎える前日であった。当時、戦局が重大

になり勉強どころではなくなった女学校では、分散して、軍需工場の奉仕や学童疎開先のお手伝いへ赴いていた。空には時たまアメリカの飛行機が飛び、各家庭の庭先には防空壕がせつせと掘られる始末だった。私は制服を脱いだモンペ姿で自転車に乗って或るネジ工場まで毎日通っていたのだ。黄色のビラが飛行機から無数に撒かれ（甲府市にも近々に空襲がある・・避難せよ・・）という内容が主だった。が、私達女学生や大人達は皆、半信半疑だったのである。（神国、日本）が負けるとは到底考えられない事だったからだ。盛夏に近い日中は蒸し暑い。道端には松葉ボタンのピンクや白、黄色の花々や向日葵の大輪が戦時下といえども咲き誇っていた。入道雲が東の空に勢力を欲しいままにしている。私はその日も工場から帰ると毎年行う自分だけの行事、竹笹に願掛けの短冊をこしらえ丁寧に小枝に結んだ。無論、（日本がアメリカに勝ちます！・・）であったり（空襲がありませんように・・）（お兄ちゃんがお国の役に立ちますように・・）だった。（東京で勉強が出来ますように・・）という他愛ない乙女の願ひ事もあった。そうして、今年はこの竹笹を善光寺さんの山門の中二階の回廊に立ててみようかと心に決めていた。それは別に根拠のあった話ではない、ただ、芥川龍之介の作品（羅生門）が、いつの間にか私をそう仕向けてしまったのである。その頃、私は、私の胸の奥に渦巻く悪とか裏切りを肯定する感情が潜んでいる事を自覚していた。母を労咳ろうがいで亡くした父が二年足らずの内に若い女と再婚したことへの、どす黒い憎悪であり、あまつさえ、赤ん坊が生まれたと言う事実、兄とたいして歳の違わないその女へ、私はヘラヘラ笑って追従し巧妙に誤魔化し続けていたのだ。・・夏の夕暮れはおそい。早夕飯を食べた私は夜を待った。義母には（友だちの家に行く）と口実を設けた。父も義母も夜は私がいけないほうがよろしいのだ、そんなことは分かりきっていた。一昨年、明治神宮での学徒動員で徴兵された四つ上の兄の顔が浮かんできた。兄は戦地で死ぬかも知れない、そんな想念が私をしきりに捉えている。私も東京へ出るべきだろう。やっと、夕闇が盆地を包み始める。心なしか風も吹いてきた。闇でなければ梯子を持ち出すことは憚れる。片手で持ち運びが可能で短い梯子で充分であった。私は、その行動を父や義母に悟られないように隠密に取り仕切った。山門までは二百メートル足らずの距離である。この時刻にはすれ違う人もいない。人家も少ないし周囲は畑だらけだ。もし、出来たら、中二階の扉の中で今夜一晩ぐらい寝てもいい、とさえ思うようになっていた。八時頃だったろうか、腕時計の蛍光塗料が闇の中で目に鮮やかに映る。山門の内側に回って二

階へ通じる手すりへ徐おもむろに梯子を延ばす。安定した土台を確保してから一段、二段、三段、足を掛け身体を預け静かに登って行く。あの（羅生門）に登場する、（途方に暮れる下人）のような趣きである。が、私は女、それも未だ少女なのだという矜持きようじ。・・作中では、回廊に夥しい死体が横たわっている状況だがここはその心配は無い。と、そこで私は竹笹を下へ置き忘れたことに気がついた。もう一度下りなければならぬ。梯子は既に持参した紐で手すりへ括りつけてあるから揺れることは無い。おそろおそろ、もんぺを引つ掛けないように再び足を下ろす。まるで奈落の底との上り下りのごとくであった。その刹那、背筋へゾクツとした感覚が走った。（誰か居る！）私の下りた後ろに人が居たのだ。人物の特定が出来なかった。（あれっ！・・）と悲鳴を口に飲み込む私、足が竦み震えが全身に來た。五秒、十秒、三十秒、・・その沈黙のなんと長い事であったか。『何をしているんですか？・・』小さな男の声であった。気配では若い男のようである。懐中電灯も持たずに山門へ走った私だが、まさか、人がいるとは考えもしなかった。若い男は兵隊の服装をしていた。それは彼が持っている携帯の懐中電灯の光りで判別できた事だった。私は不思議だった。善光寺さんに何故、兵隊さんがいるだろう。・・『自分は、愛宕山に駐屯している防空部隊の一員です。・・消灯までの自由時間に退屈だから散歩がてらに毎晩、善光寺へやってくるのです。・・安心して下さい。怪しい者ではありませんから。・・甲府は空襲の対象にはならないようだつて部隊でも皆言ってますよ、早くお家へ帰ったほうが好くはありませんか。』男のぼそぼそした小声を聴きながら漆黒の闇の中で私は顔を赤らめていた。（羅生門）の経緯など兵隊さんに説明できるものではなかったからだ。彼は私を空襲避難者と思っている。しばらく黙ったままの私は『いいんです。私、今夜この上に泊まろうと決めて来たんです。』か細い蚊の鳴くような声で大胆にそう告げる。十分後、私は若い兵隊さんに手を差し伸べられて竹笹を持ち再び梯子段を上った。無論、竹笹は回廊の中央へ飾った。兵士は目の細い丸顔の不細工な人だった。写真で見た芥川龍之介の貴公子然とは大違いであった。だが（帰った方が良い！・・）と告げたその兵隊さんの誠実が、私の眸に輝いて映った。兵隊さんの荒い息が夜のしじまに吐き出される、その脇で私はひたすら息を殺し乙女心を紡紡んでいた。灯火管制が敷かれていた盆地はただ闇一色であった。・・正にその時である、後ろの山の上方に真昼のような照明弾が放された。耳をつんざくようなキーンとなる金属音、やがて、遠方ですざましい爆発音と火の粉が上がり、次々と甲府盆地は爆撃の

標的に染まっていた。夜目にもはつきりと分かるアメリカ B29 の低空飛行の編隊、私は恐ろしさに思わず、兵隊さんに抱きついた。坊主頭をさらした若い兵隊さんは、その光景を凝視し続けている。彼の頬には涙がほろほろと伝わっている。『もう、遅い．．．もう、ダメだ．．．』呪文のような彼の呟きが私に聞こえてきた。涙は私の髪に伝わったのも私ははつきり覚えている。火の海、甲府盆地はその形容にふさわしかった。赤々と炎上する火炎の海は余りに美しいすぎた。そうして灰燼に化していく街だった。その下でどれだけの人々が阿鼻叫喚、悲惨な最期を遂げただろうと言う想像が、今度は私の震えを増殖させた。

深夜の絨毯爆撃は一向に止む気配が無い。すぐ手前まで迫る火の勢い、私の家族を含めて友人、知人、恩師が無事であろうなどという想像は何故か皆無だった。皆、焼け焦げた骸くわくろに成り果てている、そういう予感が心を占領した．．．明け方、東にうつすらと富士山が容かたちを現した時、それまで続いた興奮が収まり絶望的とも言える投げやりな気分と疲労が私を襲った。うとうととまどろむ私、そのスキを衝かれるように私はあつけないほど兵隊さんに身体を奪われた。『うつくしい！．．．うつくしい！．．．』誘い込むような妖しい言葉を確かに私は耳元で聴いていたのだ。彼は私をしつかり抱きしめながら『自分は部隊に帰らなくてはならない．．．』と自身に命令するように呟くと、戦火からまぬがれた山門を下りて白々と明け始めた愛宕山の方へ小走りに駆けて行った。すると、無性に気持ちが高じてきた。『バカ！．．．バカバカ．．．』だんだんと遠去かる男を見詰めながら全身が大きく震え出した。前方には狼煙のろしに似た無数の煙が幾筋も立ち上がり焦土と化した甲府盆地が果てしなく広がっていた。そこへ夏の朝日は容赦なく輝き始める。陽はまた昇るのだ．．．

国土防衛を唱えた兵士の男どもが、間抜けで無能、その上破廉恥であるならば、私たち女も、ふしだらに成り果てていいのだ、悪徳の囁きが、私の内部にじわっじわっと生まれ始めていた。

完